

室蘭市における産業観光の可能性

THE POSSIBILITY OF INDUSTRIAL SIGHTSEEING IN MURORAN CITY

青山 剛 ——*1 大坂谷吉行 ——*2
 樋山知花 ——*3

Takeshi AOYAMA ——*1 Yoshiyuki OSAKAYA ——*2
 Chika HAZEYAMA ——*3

キーワード：
 産業観光, 産業遺産, 工業都市, 港湾都市, 巨大工場群, 非営利団体

Keywords:
 Industrial sightseeing, Industrial heritages, Industrial city, Port city, Large factories, Non-profit organization

Industrial sightseeing is noteworthy in diversification of sightseeing needs. It is defined as a sightseeing course to include at least one industrial heritage. Muroran City had grown up as a heavy industrial city and a port city until 1971. The present situation and issues of industrial sightseeing in Muroran City were analyzed through the questionnaire to participants of factories sightseeing event. Experience to make something in young generation, combination of industrial heritages and sightseeing boat to see natural coastal viewpoints, watching whales or dolphins and restaurants were requested and should be considered to make program industrial sightseeing.

1. 研究の背景と目的

多様化・個性化・高度化する観光ニーズを背景として、自然、産業、生活、歴史、文化等の地域固有の素材を発掘し、観光資源化することで、新しい交流型の観光を模索する動きが見られる¹⁾。こうした動きとして、「産業観光」が注目されている。

日本において、「近代化遺産」は、1993年に重要文化財に新たに設けられた種別であり、近代化を担った各種の建造物や工作物を意味し、土木遺産、交通遺産、「産業遺産」の3種類がある。これらには、施設に関係する設備、機械、家具、備品類や機関車、車両、自動車等も含まれる²⁾。

「産業観光」とは、産業遺産を地域の特色として情報発信し、さらに訪問者がこれらを体験し、その意味を理解して人生をより豊かなものとするとともに、人的交流を図り、さらに新しい文化を生み出す活動と言える³⁾。さらには、地域産業が停滞・衰退している場合、産業観光とまちづくりを連携することで地域経済活性化を増大させる可能性も有している。本研究では、「産業観光」を1箇所以上の産業観光資源(工場や施設)を見学するツアーと定義する。

また、2002年度から実施される小学校、中学校、高校の新しい学習指導要領では、「総合的な学習の時間」が創設され、国際理解(異文化理解)、情報、環境、まちづくり、福祉・健康等の横断的・総合的な課題、児童や生徒の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題等について、学校の実態に応じた学習活動を行うとされている。「産業観光」は、地域の自然、産業、生活、歴史、文化を知る機会として位置づけられる。

1997年7月に完成した「室蘭市都市景観形成基本計画」⁴⁾の策定過程で「室蘭らしさ」とは何かが議論された。その結果、「室蘭らしさ」を象徴するものは、絵柄半島の太平洋岸の断崖・絶壁が続く自然海岸景観(地球岬等)と新日本製鐵室蘭製鐵所(以下、新日鐵)や日本製鋼所室蘭製作所(以下、日鋼)等の巨大工場群であることが明らかになった⁵⁾。また、室蘭港を横断する白鳥大橋が1998年6月に開通し、港湾景観への関心が高まった。室蘭港の水際線の過半数を占めており、室蘭市を象徴する巨大工場群等を観光資源として活用する「産業観光」への取り組みが2000年秋から始まった。

本研究の目的は、室蘭の産業史、景観、観光、産業観光への取り組みを踏まえて、産業観光の課題と可能性を検討することである。

2. 室蘭市の産業史

1872年に函館と札幌を結ぶ札幌本道の工事が始まり、室蘭港が開港し、森～室蘭間の定期航路が開設された。1892年に岩見沢～輪西間の鉄道と夕張鉄道が全通し、室蘭港は石炭積み出し港として発展し、海陸交通の要衝となった。なお、1892年に石炭積み出しの港湾荷役を担う栗林商會が設立された。日露戦争後の1907年には日本製鋼が立地し、1909年には輪西製鐵所(現在の新日鐵)が立地し、日本の近代化とともに発展した。1935年には檜崎造船、さらに1937年には函館どつくが立地した。太平洋戦争末期の1945年7月には空襲や艦砲射撃の被害を受けた。戦後直後は停滞が見られたが、鉄鋼業や造船は軍需から民需へ転換に成功し、日本の戦後復興の一翼を担った。また、1956年に富士セメント(現在の日鐵セメント)が

*1 室蘭工業大学建設システム工学科 助手・工修

*2 室蘭工業大学建設システム工学科 教授・工博
 (〒050-8585 室蘭市水元町27-1)

*3 北海道・札幌土木現業所 臨時職員

*1 Research Assoc., Dept. of Civil Eng. and Architecture, Muroran Institute of Technology, M. Eng.

*2 Prof., Dept. of Civil Eng. and Architecture, Muroran Institute of Technology, Dr. Eng.

*3 Temporary Staff, Sapporo Public Works Office, Hokkaido Prefecture

立地し、翌 1957 年に日本石油精製（現在の日石三菱）が立地して、鉄鋼業や造船とともに高度経済成長に貢献した。こうして室蘭市は、鉄鋼業、造船、セメント、石油精製等を基幹産業として、発展していった。そして 1970 年国勢調査人口は 162 千人となった。しかし、1971 年のドルショック、1973 年の第 1 次石油危機、1979 年の第 2 次石油危機及び円高の進行による基幹産業の不況や相次ぐ合理化によって地域経済は停滞した。そして、1990 年国勢調査人口は、基幹産業の合理化や登別市への転出（住み替え）もあって 118 千人に激減した。その後、大幅な人口減少に歯止めがかかったが、高齢化・少子化の影響を受けて毎年千人余りの減少があり、2000 年国勢調査人口は 103 千人となった。こうした状況下、基幹企業や地元企業は技術集積の高度化を図り、新分野への事業展開を進めるとともに室蘭市は企業誘致を進めてきた。1994 年 4 月には三菱製鋼室蘭特殊鋼が操業を開始し、金属加工や情報関連の先端産業も進出している。

3. 室蘭市の観光と景観

室蘭市は、天然の良港に恵まれ、岬や断崖等の風光明媚な景勝地が多い。1970 年には、「室蘭八景」として、①絵鞆岬の景観、②地球岬の絶景、③測量山の展望、④マスイチ浜の外海展望、⑤黒百合咲く大黒島、⑥金屏風・銀屏風、⑦トッカリシヨ浜の奇勝、⑧室蘭港の夜景が選定された⁷⁾。しかし、室蘭市が港湾都市、工業都市として発展してきたこと及び室蘭市が 1971 年のドルショック以降、基幹産業の相次ぐ合理化に伴う雇用対策や人口減少への対応に追われていたことから、観光や景観に対する関心は低かった。1985 年以降の地球岬の知名度向上、1988 年夏から始まった「測量山のライトアップ」、1991 年に始まった「イルカ・鯨ウォッチング」、1992 年に開業した「室蘭エンルムマリナー」といった観光資源や景観資源が増えたこと及び新日鐵の最後に 1 基残った高炉の存続が 1991 年末に決定したことから、室蘭市は 1992 年から都市景観行政に取り組み始めた。そして前述したように「室蘭市都市景観形成基本計画」の策定プロセスで、「室蘭らしさ」とは何かが議論され、自然海岸景観と巨大工場群であることが明らかになった。また、北海道の他都市では見られない巨大工場群が市民にも高く評価された。「室蘭八景」の中で、唯一の人工的な景観である「室蘭港の夜景」は、室蘭港の水際線の過半を占める巨大工場群の灯りによるものである。当時、建設中であった関東以北最長の吊り橋「白鳥大橋」は、室蘭の新たなシンボル景観^(a)と位置づけられ、1998 年 6 月に開通した。同年には、その記念館である「みたら室蘭」（道の駅を兼ねる）が開館し、白鳥大橋のビューポイントも整備され、室蘭市が、都市景観行政に続いて、観光行政に取り組み始める下地が整えられた。また、白鳥大橋は、風力発電によるイルミネーションで彩られ、絶好の夜景スポットとしても注目されている。

表 1 から、室蘭市の観光客入り込み数⁸⁾の推移を見ると、平成 2 年度以降、減少傾向にあったが、1998 年（平成 10 年）6 月の白鳥大橋の開通効果によって、著しく増加し、平成 10 年度は 200 万人を突破した。同年度の道内客と道外客の比は、ほぼ 7:3 であった。平成 11 年度は、道外客が 30%以上減少しているが、道内客は 10%未満の減少に留まっている。また、日帰り客と宿泊客を比較すると、白鳥大橋開通の効果は、日帰り客の増加が著しかった。

また、表 2 から、平成 11 年度の月別観光客入り込み数を見ると、

夏休みを含む 8 月と 7 月が多く、次いでゴールデンウィークを含む 5 月が多くなっている。そして、寒くなる 11 月から翌年 3 月までの期間の観光客入り込み数の落ち込みが著しい。道内客と道外客を比較しても全体の傾向との違いが見られない。日帰り客と宿泊客の比較から、5 月の入り込み数は日帰り客に支えられていることが分かる。また、延べ宿泊者数は 6 月が最も多い。

また、室蘭市内主要観光スポットの平成 11 年度の観光客入り込み数を見ると、白鳥大橋記念館（道の駅）が 47 万人余、地球岬が 41 万人余で多く、白鳥湾（室蘭港）が 25 万人余で続いている。白鳥大橋開通前との比較から、白鳥大橋の開通は、その他の観光スポットへの観光客入り込み数の増加に必ずしも結びついていない。

4. 室蘭市における 2000 年の産業観光への取り組み

(1) スワンフェスタ 2000 の「工場見学会」

1998 年 4 月改訂の「室蘭市観光振興計画」⁹⁾は、「工場群と企業所有施設を活用した産業観光の開発を進める。」と明記している。そして 1999 年になって、産業観光振興の具体的な取り組みが始まった。同年 12 月、「物づくりと産業観光」をテーマとしたシンポジウムを契機に、翌 2000 年 4 月に NPO 法人に認証された「室蘭地域再生工場」（以下、再生工場）^(b)が産業観光の推進母体となって、各関係団体や企業への協力要請活動を開始し、6 月には産業観光推進部会を立ち上げた。これ以降、日鋼、新日鐵等の工場見学受け入れ企業、室蘭工業大学、室蘭市、室蘭観光協会等も参加し、具体化へ実務的作業を進めた。同年 9 月には室蘭市主催のイベント「スワンフェスタ 2000」の一環として工場見学会を企画し、産業観光推進部会はその実行委員会となった。見学会は当初の 160 人定員に対して、室蘭をはじめ札幌等から 470 人の応募という予想以上の反響があった。しかし、準備の都合から抽選で 300 人の受け入れに留まっ

表 1 室蘭市の観光客入り込み数の推移 (単位:千人)

	合計	道内・道外別内訳		日帰り・宿泊別内訳		延べ宿泊者数
		道内客	道外客	日帰り客	宿泊客	
平成 2 年度	1,445	1,044	401	1,241	205	230
平成 3 年度	1,435	1,040	395	1,231	204	228
平成 4 年度	1,278	876	402	1,075	203	262
平成 5 年度	1,149	789	360	986	163	186
平成 6 年度	1,199	850	349	1,036	163	194
平成 7 年度	1,184	845	339	1,030	154	194
平成 8 年度	1,140	793	348	981	159	199
平成 9 年度	1,153	805	348	1,004	149	185
平成 10 年度	2,058	1,454	604	1,866	192	209
平成 11 年度	1,751	1,360	391	1,573	178	204

表 2 平成 11 年度の月別の観光客入り込み数 (単位:人)

	合計	道内・道外別内訳		日帰り・宿泊別内訳		延べ宿泊者数
		道内客	道外客	日帰り客	宿泊客	
4 月	98,839	81,147	17,692	85,249	13,590	14,104
5 月	229,019	183,444	45,575	213,194	15,825	16,736
6 月	172,524	141,124	31,400	153,498	19,026	20,893
7 月	323,517	247,166	76,351	304,451	19,066	19,426
8 月	352,796	251,543	101,253	334,216	18,580	18,328
9 月	186,915	142,616	44,299	172,541	14,374	15,073
10 月	146,556	116,424	30,132	129,916	16,640	17,040
11 月	56,198	45,638	10,560	43,695	12,503	13,023
12 月	37,042	30,221	6,821	25,480	11,562	11,590
1 月	55,619	45,425	10,194	44,660	10,959	11,731
2 月	37,303	30,258	7,045	26,534	10,769	11,502
3 月	55,058	45,560	9,498	39,977	15,081	15,709
合計	1,751,386	1,360,566	390,820	1,573,411	177,975	185,155

た。工場見学会は、300人を東回りと西回り（各150人）に分け東回りコースは日鋼→新日鐵→日石三菱→白鳥大橋の順に、西回りコースは白鳥大橋→日石三菱→新日鐵→日鋼の順に回った。

新日鐵は、北海道で唯一の高炉がある製鉄所であり、主要製品は棒材、線材である。最盛期には4基の高炉があったが、現在は1基の高炉のみが稼働している。高炉の外観を見た後に棒鋼工場を見学できる。日鋼は、大型プレスによる鍛錬作業、大型工作機械による機械加工、溶接組み立て作業を見学できるほか、付属施設である鍛刀所（日本刀を製作）や瑞泉閣（迎賓館）を見学できる。日石三菱は、大型タンカーで運ばれてきた原油を精製、分離して製品とする工程のビデオを見た後に、バスで構内を一周して、原油タンク、製品タンク、精製プラント等の装置群を見学できる。

(2) 「工場見学会」参加者へのアンケート調査結果

工場見学会参加者300名を対象としたアンケート調査の集計と分析を行った。回答者数は249人、回答率は83.0%である。

a) 単純集計の結果

参加者の年齢は、70歳以上が26.9%、60歳以上が26.9%、50歳以上が18.9%、40歳以上が15.7%、30歳以上が8.4%、20歳以上が4.8%、10歳以上が7.2%、10歳未満が0.4%、年齢不明が2.4%であり、中高年齢層の参加が多い。参加者の性別は、男女半々であり、男女差は見られなかった。参加者の居住地は、室蘭市が58%、胆振支庁管内（室蘭市を除く）が14%、札幌市が10%、それ以外の北海道内市町村が10%であった。今回の工場見学会を知った媒体は、新聞記事が最も多くて111人、次に室蘭市の広報誌「こうほう室蘭」が101人と多く、さらに知人の紹介が36人であった。

一番印象に残った見学対象（複数回答）は、新日鐵棒鋼工場が122

人と最も多く、新日鐵高炉の82人、日鋼瑞泉閣の65人、日鋼鍛刀所の57人、日石三菱の50人、日鋼発電所跡の34人と続いている。

工場見学会の価値は、3,000円以上が9%、2,000円～3,000円が20%、1,000円～2,000円が26%、500円～1,000円が27%、500円未満が12%、未記入が6%であった。なお、室蘭市がバスのチャーター代を支出し、各企業が工場見学会に要する費用を負担したので、参加者の実際の負担は、500円（昼食の弁当代）のみである。

見学会の所要時間は、午前10時から午後4時の6時間であった。所要時間については、「ちょうど良い」が75%、「長い」が15%、「短い」が6%、未記入が4%であり、概ね、妥当であったと言える。

参加者の満足度は「満足」が50.2%、「やや満足」が36.5%と、肯定的な評価が9割近くを占めた。

工場見学会に加えて欲しいもの（複数回答）は、「室蘭の他の観光地と組み合わせる」が161人と最も多く、「体験して何かを作れる」の53人、「レストランで昼食をとる」の52人、「詳しく勉強」の42人が続いている。組み合わせる観光地は、「外海遊覧」の66人と「イルカ・鯨ウォッチング」の61人が多い。次いで夜景の42人、祝津展望台の38人、地球岬の36人、測量山の35人が続いている。自由意見記述者144人（回答者の57.8%）から187件（複数意見可）の意見があった。半数近い90件（57.8%）は、「良かった」、「感動した」、「良い企画」、「勉強になった」、「機会があれば、また、参加したい」等の好印象の意見であった。それ以外では、①食事や案内の対応、禁煙や時間の苦情等に対する不満が28件（15.0%）、②他の観光地との連携等の観光に関わる意見が24件（12.8%）、見学内容に関わる意見が18件（9.6%）、④PRやガイド等のソフト面への意見が12件（6.4%）等があった。

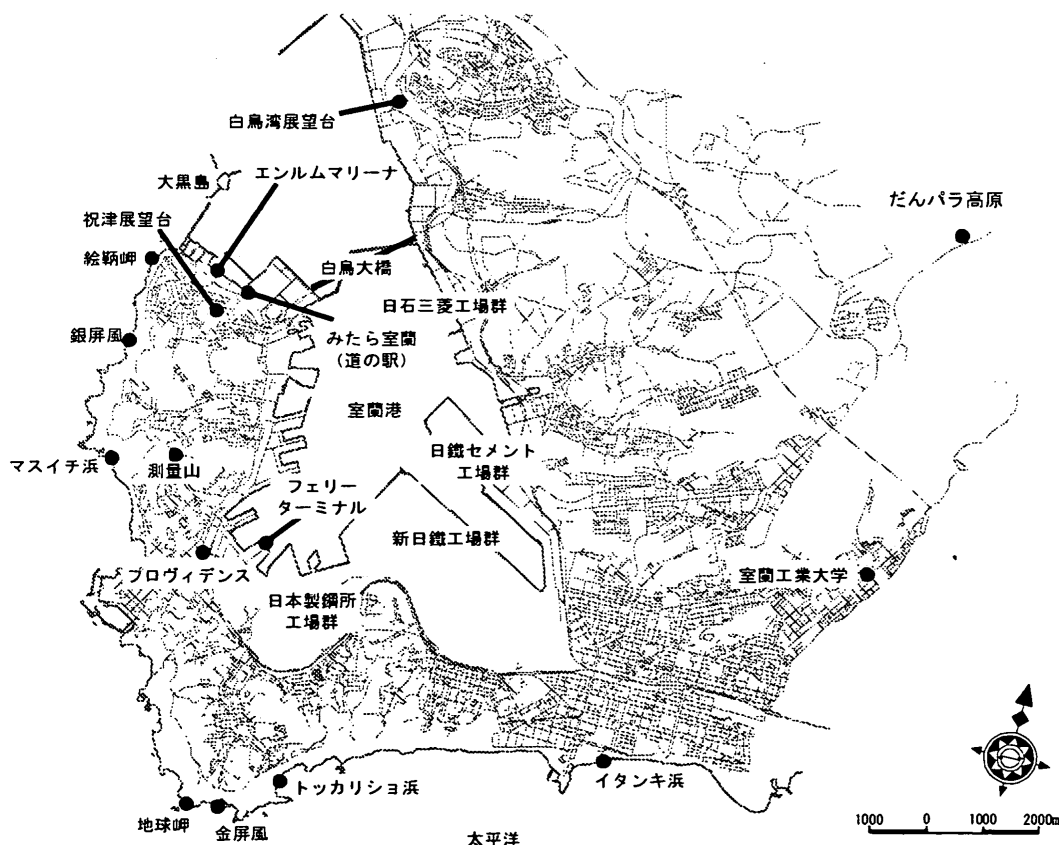


図1 室蘭市の産業観光資源と景観資源^{10), 11)}

b) 年齢とのクロス集計の結果

満足度は、参加者の居住地、年代に関係なく多くの人が肯定的な評価をしている。50歳以上は「満足」が「やや満足」を上回り、5割以上が見学会を満足と評価している。「印象に残った見学施設」は、「棒鋼工場」が50歳未満の人に比較的人気がある。日鋼の発電所跡は40歳未満で全く選択されていない。20歳未満では、棒鋼工場の42.9%、高炉の28.6%、鍛刀所の23.8%と3項目に集中しており、他の年代に比べてもこれら3項目の比率は高い。これ以外では瑞泉閣がわずか4.8%となっているが、発電所跡や日石三菱の構内は全く選択されていない。

「工場見学に加えて欲しいもの」について、20歳未満は「体験して何か作れる」が最も多く、その比率も46.4%と他の年代に比べ最も高い。また、20歳未満は「もっと詳しく勉強できる」を全く選択していない。「室蘭の他の観光地と組み合わせる」については、20歳未満を除いた各年代で最も比率が高く、年代が上がるともに、その比率が高くなっている。「レストランで昼食をとる」については、各年代ともに1～2割で、年代間の差が見られない。

c) まとめ

参加者の満足度の高さや自由意見から、工場見学会は幅広い年代の参加者に受け入れられたことが分かる。特に、中・高齢層に満足感を与える内容であった。また、見学会は工場群の存在が日常化している地元の人も満足できる内容であったと考えられる。

食事内容やガイドの説明等への要望や不満が見られたことから、今後、観光としての演出やサービスに配慮が必要である。

他の観光地との組み合わせや体験機会の追加への要望が多いことから、工場見学のみでは観光として魅力不足であると考えられる。特に、若年層は棒鋼工場、高炉、鍛刀所といった実際に動くものに対して強い印象を受けていること、何らかの体験機会への要望が多いこと、単なる見学のみでは満足しないことから、能動的なメニューの提供が求められる。

5. 室蘭市における2001年の「産業観光」の取り組み

(1) 第1回産業観光モデル事業(4月のツアー)

室蘭工業大学の学生サークル「Studio 催事」が企画、運営を担当し、再生工場が主催した産業観光が、4月14日(土)に実施された¹²⁾。実施日を入学式直後に設定し、室蘭工業大学、市立室蘭看護専門学校等の新入生に参加を呼びかけた。ツアーには、新入生19人とStudio催事のメンバー12人が参加した。コースは、新日鐵(棒鋼工場)→日鋼(発電所跡、瑞泉閣、鍛刀所)→地球岬→地ビールレストラン「プロヴィデンス」→祝津展望台からの夜景→白鳥大橋である。所要時間は、13時30分から20時30分の7時間であった。参加費は、地ビールレストランの食事代を含めて2,000円とした。

ツアーで印象に残ったもの(1位が3点、2位が2点、3位が1点の合計点)は、高い順に①白鳥大橋の32点、②祝津展望台の27点、③地ビールレストラン「プロヴィデンス」の22点、④地球岬の13点、⑤棒鋼工場の7点、⑥鍛刀所の6点であった。瑞泉閣は誰も3位までにあげていなかった。満足度は、「とても満足」が10人、「まあまあ満足」が9人で、「不満が残った」は0人であった。行ってみたい他の観光地は、①登別マリンパークニクス(水族館)が7人、②室蘭沖のイルカ・鯨ウォッチングが5人、③登別のくま

牧場が4人、④室蘭八景と登別温泉の地獄谷が各3人であった。

(2) 第2回産業観光モデル事業(5月のツアー)

「地域再発見 まるごと輪西=五感で体験」と題して、室蘭市内外の一般市民を対象として、5月20日(日)に実施した。コースは、新日鐵の工場見学→輪西食べ歩き(昼食)→イタンキ浜鳴り砂体験で、所要時間は5時間であった。参加者29人のうち、24人がアンケート調査に回答してくれた。ツアーを知った媒体は、新聞記事が9人、友人が3人、その他が12人で、ホームページで知った人は0人であった。印象に残ったもの(複数回答)は、多い順に①新日鐵棒鋼工場見学が17人、②イタンキ浜の鳴り砂体験が13人、③輪西食べ歩きが8人、④新日鐵高炉見学が7人、⑤その他が1人であった。参加費2,000円については、多い順に①ちょうど良いが11人、②安いと思うが8人、③少し高いが5人で、④とても高いは0人であった。満足度は、多い順に①とても満足が13人、②まあまあ満足が10人、③不満が残ったが1人であった。ツアーをより魅力的にするための付加価値については、①体験して何かを作れるが11人、②室蘭の他の観光地・施設も見ることができるが8人、③その他が4人であった。自由意見では、高炉は外観だけの見学であったことから、棒鋼工場と同様に内部を見学したかったという意見が多かった。

(3) 第3回産業観光モデル事業(6月のツアー)

「地域再発見 まるごと母恋=五感で体験」と題して、6月20日(水)に実施された。コースは、日鋼(発電所跡、鍛刀所、瑞泉閣)→日鋼1号役宅レストラン(昼食)→地球岬散策(野鳥観察を含む)→白鳥大橋であり、所要時間は5時間であった。参加費は5,000円で、バス代、昼食代、ガイド代、保険料の合計である。参加対象は20歳以上で20人を募集したが、実際には29人が参加し、全員からアンケート調査の回答を得た。参加者の年齢は、多い順に60歳以上が13人、②50歳代が11人、③40歳代が3人、④30歳代が2人で、20歳代の参加者はいなかった。ツアーを知った媒体(複数回答可)は、多い順に①友人の誘いが17人、②新聞記事が16人で、5月のツアーと同様にホームページは0人であった。ツアーで印象に残ったもの(複数回答可)については、多い順に①瑞泉閣が27人、②鍛刀所が23人、③地球岬での自然観察が23人、④工場見学が19人であった。新入生の場合、誰も瑞泉閣をあげなかったのに対して、今回は瑞泉閣が最も多く、対照的な結果となった。ツアー料金5,000円については、多い順に①ちょうど良いが19人、②少し高いが8人、③安い人が2人で、④とても高いは0人であった。ツアーの満足度は、「とても満足」と「まあまあ満足」が各々14人ずつであった(なお、1人が無回答)。ツアーをより魅力的にするために付加すべきものについては、「体験して何かを作る」と「室蘭の他の観光地・施設を見る」が共に9人ずつであった。

(4) 室蘭観光ツアー「秋の室蘭へどうぞ」

室蘭商工会議所の主催で、札幌市民を無料招待して9月27日(木)に実施された。同商工会議所と室蘭観光協会が8月に札幌市内で行った室蘭の観光キャンペーンで458組934人が応募し、抽選で21組43人の無料招待者を決定した。コースは、札幌→地球岬→日鋼→地ビールレストラン「プロヴィデンス」→スワンフェスタ2001イベント会場→白鳥湾展望台(工場群の夜景)を回って札幌に戻る。所要時間は札幌発着で約12時間になる。

題を示す。児童・生徒の場合、工場見学は、これまで社会科の時間に行われており、2002年度からは「総合的な学習の時間」に行われる。授業の一環であることから、「観光」（遊び的なニュアンスがある）を嫌う傾向がある。企業と同様に、学校も「観光は物見遊山だけでなく、自ら見て学ぶ、あるいは感じ取ることも含まれる」ことを踏まえて、意識改革を進める必要がある。

観光客の大半を占める一般人の場合、工場見学だけでは興味が持続しないので、他の観光スポットや食事と組み合わせることが必要である。満足度は、工場見学以外の観光スポットや食事内容にも左右されるので、その他の観光スポットの選択や食事内容の充実に配慮する必要がある。

産業史や郷土史等に興味を持っている人や関心が高い人の場合、通り一遍の工場見学や説明だけでは物足りない印象を与えがちである。従って、対象となる工場や施設の相互関係や産業史上の意義等を整理してストーリー性のあるコースを設定し、参加者が学習したという充実感を増大させる内容の工場見学会にしていける必要がある。

産業観光の先進事例である中京圏においても、2000年4月現在、定期観光バス全4コースのうち3コースに産業観光施設が1箇所ずつ組み込まれているが、乗車率は低いという現実がある。

室蘭市における取り組みや中京圏の事例から考えて、室蘭市において産業観光が単独で成立する可能性は高くない。現状では、産業施設だけを回る産業観光（昼食を含む）は、年に2回程度しか成立しないと考えられる。毎月1回～2回の産業観光を含むツアーを実施する場合、産業観光施設（主に工場）の見学先を1箇所にして、他の観光資源と組み合わせることが不可欠である。

7. 室蘭市における産業観光の実現に向けて

第6章で述べた課題を克服し、室蘭市における産業観光を実現するためには、以下のような取り組みを進める必要がある。

第一に産業観光の意義や目的を明確にして、行政、企業、市民、支援グループのコンセンサスを得ることである。これまでのツアーは、日程等が十分に調整されていない。再生工場、室蘭市、室蘭商工会議所、室蘭観光協会、見学対象企業、胆振支庁、旅行会社、室蘭工業大学等の関係者で年間の企画を十分に練り上げるとともに、各関係主体の果たすべき役割を明確にしていくことが重要である。

第二に産業遺産等に関する調査や情報発信が必要である。室蘭市と室蘭工業大学の産業観光をテーマとした共同研究が決定しており、郷土史家、文化人、観光協会等との連携の下で、調査を行って、資料としてまとめるとともに、活用方策を検討する。産業観光ツアーや産業観光に関する講演会等の開催、旅行関連イベントへの参加等を通じて、産業観光キャンペーンを展開していく必要がある。北海道（胆振支庁）や室蘭市の広報誌で情報発信するほか、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ等で室蘭市の産業観光が紹介される機会を増やし、産業観光の認知度を高めていくことが重要である。

第三は、産業観光に観光らしい魅力や楽しさを加味することである。そのためにはイベントや既存観光地との連携、体験型メニュー等が必要である。特に児童、生徒、大学生は、見るだけでなく、何かを作る体験を求めている。

第四は、「総合的な学習の時間」に産業観光を採り入れることである。小学3～6年生、中学生、高校生と、ほぼ3年に1度、学習レ

ベルに応じて、産業観光は自分たちが住んでいる室蘭を見つめ直す機会を提供することになる。広域的な展開を考えれば、最近、整備された縄文時代の史跡「北黄金貝塚公園」（伊達市）や有珠山噴火遺構（虻田町）と産業観光を組み合わせることもできる。また、室蘭市内の児童や生徒だけでなく、近隣市町村や札幌圏の児童や生徒の「総合的な学習の時間」や修学旅行に室蘭市の産業観光を採り入れることを働きかける。

第五に室蘭の産業観光は当面、西胆振圏において洞爺湖温泉や登別温泉との連携強化に重点を置くべきであるが、将来的にはその他の地域と産業観光ネットワークの形成を図っていくべきである。例えば、室蘭港が石炭積み出し港として発展した歴史を踏まえて、空知地域の旧産炭地との歴史的繋がりを活かすことである。

第六に北海道全体との関係であるが、北海道は明治維新後、開拓と近代化が同時に進んだことから、開拓史と関係の深い産業遺産をネットワーク化することで、北海道全体を舞台とする産業観光圏を形成する可能性を有している。室蘭市の鉄鋼業を中心とする工業は北海道の近代化にも大きく貢献したことから、室蘭市の産業観光が、北海道全体の産業観光圏形成の先導役となることを期待したい。

参考文献・参考資料

- 1) 総理府編：観光白書（平成12年度版） 2000年6月
- 2) 伊東孝：日本の近代化遺産～新しい文化財と地域の活性化～ 岩波新書695 岩波書店 2000年10月
- 3) 須田 寛著：観光の新分野 産業観光 1999年5月
- 4) 室蘭市：室蘭市都市景観形成基本計画 1997年7月
- 5) 大坂谷吉行：工業都市室蘭における初動期の都市景観行政に関する報告 都市計画論文集 No.35 pp.673～678 2000年10月
- 6) 北海道経済部編：平成10年度 商工労働観光白書 1999年2月
- 7) 室蘭観光協会：ふるさと室蘭ガイドブック 1994年
- 8) 室蘭市：室蘭市統計書 平成12年度版 2000年
- 9) 室蘭市観光振興課編：室蘭市観光振興計画（改訂版） 1998年4月
- 10) 室蘭市：室蘭市都市景観現況調査 1994年3月
- 11) 室蘭観光協会：ふるさと室蘭ガイドブック 1994年
- 12) 室蘭民報社：産業観光スタート 室蘭民報 2001年4月15日付け朝刊
- 13) ジャスナイスウィング：JAS 旅倶楽部「旅の菜」（2001年7月～9月主催旅行）11頁

注 釈

- (a) 新室蘭八景として、①白鳥大橋、②エンルムマリーナ、③母恋富士下の桜並木、④測量山・唐松平公園、⑤入江臨海公園、⑥イタンキ浜、⑦だんバラ高原、⑧NHK室蘭放送局モニュメントが選ばれている。
- (b) 室蘭地域再生工場は、2000年設立のNPOで、一般市民、地元立地企業の社員、室蘭市観光協会職員、室蘭市職員、室蘭工業大学教官及び学生等がメンバーになっている。
- (c) 2001年になって室蘭の伝統的な庶民の味である「室蘭焼き鳥」（豚肉と玉ネギを焼いて洋がらしを添える）を全国に売り込もうとする動きが室蘭市内で活発化している。
- (d) 室蘭岳山麓総合公園があり、ログハウス、キャンプ場、炊事場、屋外運動施設、体育館、広場、研修・宿泊施設等があり、冬季はスキー場が開設されている。

[2001年10月18日原稿受理 2002年2月18日採用決定]